家庭科における深い学びの実現に向けた授業の提案

川又　美穂
教科領域コース

１．研究目的

現在の学校教育現場では，「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。ここでいう「深い学び」とは，知識の獲得や理解に留まらず，知識の有意義な使用を可能とする力の獲得を促す学びである(Marzano,1992)。「できる」，「わかる」学力からさらに高次の「使える」学力へと導く学びとも言われる(石井,2015)。こうした学びの実現には獲得した知識が転移可能なものとして生きて働く必要がある。家庭科においては家庭生活や生活場面を含んだ本物の実践への参画として，児童生徒が自身の生活と直接向き合うことを促す取り組みが行われてきた。しかし，家族や家庭生活の多様化に伴い，児童生徒のプライバシーへの配慮が教員の大きな課題となっている。上記の状況にある中で，堀内(2022)は，自分ごととして物事を捉えて向き合うための方法として「直接的な自分ごと」と「間接的な自分ごと」の二つを挙げる。後者は「共感を持って相手のことを理解し考えようとする場合」であり，他者への共感を通し，他者を自分にとって「意味ある存在」へ昇華させることで，他者と向き合う学びが自分ごと化される。これらの知見が明らかにしているように，学びの自分ごと化は学び手がいかに当該事象を自分にとって有意なものと認識できるかが重要である。家庭科の学習における学び手のプライバシーへの配慮が一層強く求められている今日では，学びを自分ごと化するために「直接的な自分ごと」化が本当に必要か慎重に検討される必要があろう。そこで，本研究では，まず，家庭科の学習活動と学び手のプライバシー意識との関係を調査する。次いで，上記調査の結果を踏まえ「間接的な自分ごと」化を取り入れた授業において深い学びが実現できたかを検討する（図１）。これらによって，プライバシーに配慮しつつ学びを自分ごと化し「深い学び」の実現に至る授業方法の提案を行うことが本研究の目的である。

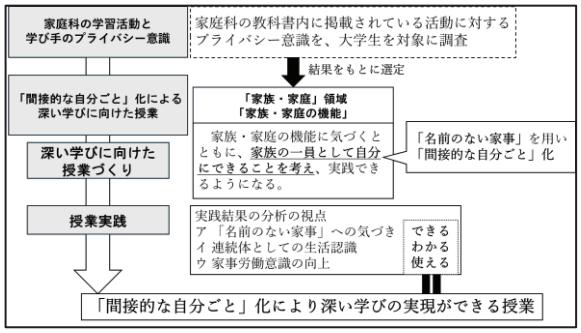

図１．研究の構成

２．研究方法

２－１．家庭科の学習活動と学び手のプライバシー意識

Ｉ大学に在籍する学生97名に対し，集合調査法により，Google Formsと，質問紙を使用した質問紙調査を実施する。調査時期は，令和５年８月～10月である。単純集計で分析を行う。

２－２．「間接的な自分ごと」化による深い学びに向けた授業

２－２－１．深い学びに向けた授業づくり

「2-1」の結果を踏まえ，授業の指導計画を作成する。本研究の目標を達成するために取り上げ

たのは，高等学校家庭科における「家族・家庭生活」領域の全 3 時間の授業である。授業の目標は，「家族・家庭には様々な機能があることに気づくとともに，家族の一員として自分にできることを考え，実践できるようになる」である。「間接的な自分ごと」化のための手立てとしては「名前のない家事」を用いる。「名前のない家事」は，実際に家事の実務を行うことにより初めて気づく種類の活動であり，この存在に気づくことで生徒たちは家事の担い手のおかれている立場を理解することができる（できる）。また，私たちの生活は「見えない家事」を含む複数の活動の連続体である。しかし，家庭科の授業においては，本来は連続体であるはずの家事労働の一部を準備が整えられた環境下で体験することが多い。こうした授業においては，児童生徒は個々の知識・技能を身につけることはできても，それを生活の中で「使える」深い学びへと転換することは難しい。そこで，「名前のない家事」を取り入れることにより，私たちの生活が複数の活動の連続体であることに気づけるようにする。その認識ができるようになることは，実生活に即した実践的な生活認識ができるようになることを意味すると考えられる（わかる）。授業を通して生徒たちが家事の自分ごと化を達成できたかは，授業後のアンケートにより自分自身を家事の担い手として捉えられているかを確認することによって把握できる（使える）。

２－２－２．授業実践

(1) 授業対象

Ｉ大学教育学部附属中学校の第 1 学年 4 クラス 139 名に対し，各クラスの「技術・家庭（家庭分野）」に全 3 時間の授業を行う。実施期間は令和 7 年 1 月 15 日(水)から 1 月 31 日(金)である。

(2) 分析方法

分析の視点は，「名前のない家事」に気づくことができるようになったか（以下，「名前のない家事」への気づき），連続体として生活を認識できるようになったか（連続体としての生活認識），家事労働を行うことに対する「積極的」意識が高まったか（家事労働意識の向上），の 3 つである。「名前のない家事」への気づきは「できる」段階。連続体としての生活認識は「わかる」段階。家事労働意識の向上は学習を「使える」段階に至ったことの指標である。３つの視点での分析を通して，「間接的な自分ごと」化を取り入れた授業において，「できる」，「わかる」学力からさらに高次の「使える」学力へと導く「深い学び」が実現できたか検討を行う。

ア　「名前のない家事」への気づき

分析資料は，第 1 時と第 3 時の授業内で作成し提出された 64 名分のウェビングマップである。第 1 時と第 3 時のウェビングマップを比較し，記述数と記述内容の量的分析を行う。記述内容は，キーワードや関連した内容ごとにグループ化し集計を行う。第 1 時と比較し，第 3 時で「無償労働，家事」に関する記述が増加した場合，家事やそれに付随する「名前のない家事」への認識を授業によって深めることができたととらえる。

イ　連続体としての生活認識

分析資料は，第 2 時の授業内で行う，生活の一場面の前後で行われている家事や行動を考える活動を記したワークシートである。考えられていた行動数の量的分析と，記述の質的分析を行う。生活の一場面の前後で行われている家事・行動として記述した行動数が多いほど，生活を連続体として認識ができているとする。また，行動の内容が「名前のない家事」や現実的に実現可能な行動であるほど，実生活で活かすことのできる実践的な生活認識ができているとする。

ウ　家事労働意識の向上

集合調査法により，Google Forms を使用した質問紙調査を実施し，その回答結果を分析資料として用いる。調査対象は，Ｉ大学教育学部附属中学校第１学年，139 名である。調査時期は，令和 7 年 1 月で，上記の題材を授業として実施する前と後に実施する。回答者数と回答率は，授業前は 78 名(56.1%)，授業後は 90 名(64.7%)。有効回答数は授業前，授業後ともに 100%である。調査項目は，家事をすることに対するイメージである。アフターコーディングにより分析を行う。分類は，家事に対する印象が「積極的」または「消極的」のいずれかに着目して分類する。「積極的」とは，家事に対して内発的動機や積極的に関わろうとし，良い印象を抱いている記述のことを指す。また，「積極的」な回答の中で，自身を家事の主体と捉え，自分の仕事，自分や自分の将来に役立っていると捉えている記述は「自分ごととして捉えている」回答として分類を行う

３．結果と小括

３－１．家庭科の学習活動と学び手のプライバシー意識

(1) 結果

領域別に最も「プライバシーに触れられていると感じる」割合が高かった事項は，「食生活」領域の「BMI」75 名(84.3%)であった。そのほか「プライバシーにふれられていると感じる」割合が過半数を超えた領域は，「消費生活」，「生活設計」，「食生活」，「保育」，「衣生活」，「住生活」，「高齢者」，「家族・家庭」であった。活動で扱う事項の種類については，自身の体型や家庭の経済状況，家族的背景，自身の恋愛に関することで，学び手のプライバシー意識が強く働くことが確認された。

(2) 小括

生徒の家庭の状況が多様化した現在において，教科書の全領域にプライバシーに触れる可能性のある活動が含まれており，教員には生徒の実態把握が求められる。家庭のあり様は今後も多様化していくことが予想されるため，そうした変化に耐用する学びの在り方の検討が求められる。授業領域は，「家族・家庭」を選定した。これは，「プライバシーにふれられていると感じる」割合が過半数を超えた領域であり，「直接的な自分ごと」化で，生徒自身の生活や家族のことを振り返る必要が出てくることから，プライバシーに配慮した学びの在り方が求められる領域であるためである。

３－２．「間接的な自分ごと」化による深い学びに向けた授業

(1) 「名前のない家事」への気づき

第 1 時と第 3 時のウェビングマップを比較した結果，記述数が増加した生徒は 46 名(71.9%)であり，「名前のない家事」を含む「無償労働，家事」に関する記述が 35.87%増加した。

(2) 連続体としての生活認識

生活場面の前後にある行動を記述させたところ，最大で 47 件の行動が挙げられた。ゴミの分別や卓上の整理など，細かな諸活動が連続して生活を構成していることへの気づきが見られた。

(3) 家事労働意識の変容

授業前後のアンケートにおいて，家事に対して消極的イメージを抱いた記述が授業前は 72.0%，授業後は 1.9%に減少した。積極的イメージを抱いた記述が授業前は 25.8%で，授業後は 93.3%に増加した。家事を「自分ごととして捉えている」回答は 4.3%から 12.2%に増加した。

(4) 小括

「名前のない家事」への気づきでは，「無償労働，家事」に関する記述が最も顕著に増加し，本授業が「名前のない家事」への生徒の気づきを効果的に促進したことが確認できた。特に，第２時で提示した「見えない家事リスト 162」は，生徒が認識していなかった家事を可視化し生徒自身の日常生活における無自覚な家事行動への認識を深める契機になったと考えられる。

「連続体としての生活認識」では，一部に家事とは直接関連しない行動が見られ，生徒が「生活を構築する行動」と「家事」の区別を明確に認識できなかったことが確認された。また，「断食」などの非現実的な対応策が見られ，生徒が与えられた状況の中で，現実的な判断に基づいた家事行動を構想する能力に課題が残ることも浮き彫りになった。これらの課題を克服するためには，活動前に「名前のない家事」の具体例を詳細に提示することや，労働と労働の「つなぎ」として行われる行動に焦点を当てて思考を促す工夫が必要であると考えられる。

「家事労働意識の向上」では，家事に対し「積極的」な印象を抱いた生徒が増加したにもかかわらず，家事を「自分の将来に役立つ」など，「自分ごと」として捉えている記述がわずかに留まったことは今後の重要な課題である。本研究では，「名前のない家事」を実践する家庭学習を設定し，実践により手応えや自信を感じて，実践の継続につながることをねらったが今回は家庭での実践が一度きりであったことから，家事を行うことによる手応えや自信にはつながらなかったためではないかと考えられる。家事の意義の理解と，家事を自分ごととして認識することの間には，依然として隔たりがある。「使える学力」を身につけるに当たって，今後は生徒が家事の主体としての意識をより強く持ち，家事が自身の生活や将来にどのように貢献するか内発的に捉えて継続的な実践を促す仕組みや，家事の自己成長的な側面を強調する指導の導入が求められる。

４．まとめと今後の課題

現実の生活において家事労働は切り分けの難しい諸活動を含む連続体として存在している。従来の家庭科の授業では，そうした連続体の一部を切り取り，そこに含まれる個々の知識・技能を整えられた環境の下で獲得することが目指される。そのため，現実生活の中においてはそれらを使いこなすことができないことが多い。本研究で扱った「名前のない家事」の教材は，生徒たちが暮らす生活やそれを支える家事労働をより実態に近い形でとらえ，連続体としての生活の中から自分にできることを見つけて学習を生活のなかで活用する力を育成することに対し一定の効果があったことが示された。加えて，「見えない家事リスト 162」等，家事の当事者の声を取り上げた教材が学習成果に影響を与えたことから，「間接的な自分ごと」化によって生徒のプライバシーを侵害することなく「家族・家庭」領域の学習においても「深い学び」に到達できることが明らかになった。

しかし，家事労働意識の向上が継続的な実践につながっていくことは確認できなかったことが課題としてあげられる。また，家事を自分ごととしてとらえることについては，生徒たちは十分理解できたとはいえない結果であった。今後，これらを克服するための手立てを研究し，真の意味での生活主体を育成し，深い学びを実現していく授業を考えていくことが残された課題である。

５．引用・参考文献

堀内かおる．2022.「子どもたちが『自分ごと』として取り組む学習を促す教師の手立てとは」『KGK ジャーナル』vol.57-1(開隆堂).

石井英真．2015.「今求められる学力と学びとは―コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影―」(日本標準).

Marzano, R.J.　1992.　“A Different Kind of Classroom: Teaching with Dimensions of Learning” (*ASCD*) .